

# 父、石田頼房「もえぎ野通信」の思い出

石田 周一

手元に「もえぎ野通信」が残されている。父が3人の子どもにあてて書いていたメールレター。几帳面な父がメールをワードにコピペして保存していたものだ。読者からの返信も、全部ではないだろうが保存されている。2001年3月の第1号から2008年11月の362号。たびたび号外も出ているので、おそらく400～500通。A4判で400枚弱。母がこういう凝り性の父に「こりふさ」というニックネームを付けていたことを思い出す。

第1号を読み返しても、どういう経緯で始まったのかは不明だ。父自身が作った年譜には「ネットとメールを始めたのは1999年8月」という記録がある。年譜は公的なものと私的なものが残されている。ちなみに、公的なものはA4判で16枚、私的なものはA4判で33枚。公的なものは、ご希望いただいた方にはお送りしている。私的なものも家族の情報を一部編集すれば送ることも可能と考えているが、どうか。しかし、その年譜には「通信」を始めたことは書かれていない。

2001年11月19日のno.26は、『二人で歩いた まち・むら・人生』に全文がある。「午前2時に目覚ましをかけて、獅子座流星群を見に二人で出かけました。出たときには、雲がほとんど空を覆い、こりや駄目かなと思えました。(中略)結局4時半近くまで見て、2～300は見たねと満足して帰りました。帰り道でも、まだ、いくつかの流星が見られました。二人とも、とてもハッピーな気分になりました。これから一杯飲んで寝ます。」興奮しながら帰宅し、すぐに報告の通信をメールしたようだ。

しかし、この1週間後に母は倒れ、意識不明のまま1か月後に他界している。25号までは、野鳥や昆虫のこと、仕事や体調のこと、9.11直後の米国出張のことなど。そこには、あたりまえに母がいる。

母が入院していた1か月の間も5回ほどの通信があった。そして、31号からは、やもめ暮らしの通信となり、その春から「週刊」となった。

やもめ暮らしの身辺雑記では、食事のことや家や庭の片付けのことが多い。父は母がいたころから食事作りはしていたので、技術的にはさほど心配はなかった。一人でもちゃんとした食事をしていることがメニュー付きで報告されるときもあった。一方で、忙しくていい加減なもの(例：作り置き付け足し連続鍋)も告白。それは、「だれかいっしょに食事をしよう」というメッセージ？やはり一人での食事は味気ないものと、行間ににじみ出ている。そこで、子どもたちはときどき訪ねてはいっしょに食事をしている。母がいたころは、訪ねても「早く帰れ」みたいな顔をしていた父も歓迎してくれた。そこで、私が勤務先で作った野菜を持参し、何品か足してのプチ宴会なども懐かしい。親父さんの懐をあてにして、近所の居酒屋に出かけた記述も多くある。一人暮らしの人間が4人集まって家の中が混乱している様子も。しかし、一人のときのほうが多かった父。アルコールをたしなむ日を「酒面雁<sup>さかづらがん</sup>」、休む日を「九官鳥」と鳥の名になぞらえていた。



谷本川のカルガモの親子  
『二人で歩いた まち・むら・人生』より

好きな野鳥のことの記述は、多いし、詳細だ。母といっしょに歩いた散歩コースがある。もえぎ野公園から、谷本川サイクリングコース、中里学園を経て帰る約4kmのコース。公園の池ではカルガモが子育てをするが、無事に育たない雛のほうが多くヤキモキ。犬を散歩させる人が多いのだが、目に余るのは注意していたようだ。池の生き物にパンなどをやるのも「環境を悪化させ生

き物に害がある」と怒っていた。カワセミは、池と川の両方で見られる可能性がある。両方が見られた日には、その喜びを号外で知らせてくれている。

母が趣味の写真でいいショットを撮った場所は、「裕子ポイント」と名付けていた。運よく姿を見せてくれば、母とのコースを一人歩いた父を慰めてくれたようだ。庭では巣箱で子育てをするシジウカラも気になるし、訪れる鳥の種類の増加に期待。サンコウチョウが来たときの喜びには、「一緒に見られたらなあ」とある。その他、海外へのウォッチングツアーも含めて、多くの鳥に関する記述がある。

北極圏、ドナウデルタなどには一人でツアー参加。雪の伊豆沼には4人で行った思い出と私と2人の屋久島旅行も記録がある。工学院大で超高層ビル街のハヤブサの詳細な観察記録を書いたのは通信発行以前だった。子どもたちはさほど鳥に興味がないのだが、これだけ書かれれば多少は感化される。今では、池の鳥たち、庭の巣箱、近隣のツバメの巣などを気にするようになっていく。代掻きのトラクターを追うアマサギをいっしょに見た記述は何度も読み返してしまう。庭の鳥の声に父を連想することがある。

もちろん、仕事に関する記述もある。しかし、子どもたちには専門的な内容はほとんど通じず、反応は鈍い。原稿書き、勉強会など、スケジュールの報告と備忘録というか日記のような感じ。

「通信」とは別に「10大ニュース」をまとめた文書もある。「私の」と「わが家の」がある。これは、1995年からのものだ。

「① 東京都立大学を定年退職し年金受給者となる。引き続き工学院大学建築学科に勤める。〔さびしかったこと〕で、始まっている。以下、〔とまどったこと〕〔楽しかったこと〕〔疲れたこと〕〔驚いたこと〕〔うれしかったこと〕〔情けないこと〕〔困ったこと〕〔不愉快なこと〕〔苦勞したこと〕などが続いている。

2001年で「わが家の」は終了している。「わが家の」を読むと私のそのころが分かるのに残念だ。まあ、あくまで母がいてわが家なのか？ 2002年は、「①ともかく、独居老人生活1年間を健康ですぞ。〔ヤレヤレということ〕で始まっている。この「ヤレヤレ」というフレーズは「通信」にも多く出てくる。野村監督のボヤキのようなものか？ 2005年には、「⑩強く誘われて初めて敬老会に出席したが〔歌と踊りでは、もう帰老会〕などとオチャメな表現もある。いや、親父ギャグか？ 父の仕事関係者は意外に思うかもしれないが、ダジャレやギャグもときどきあるのだ。また、「5時55分に家を出発して、7777歩散歩をしてきた」という妙なコダワリも……。

2004年には、「⑥樹林愛護会にますますはまり込む。「だより」にも寄稿。〔酒・怪我、自分の愛護にも注意！〕」がある。2003年2月にもえぎ野ふれあいの樹林愛護会に入会している。ふれあいの樹林は横浜市が市街地に残る緑地を保全するために実施している制度だ。所有者から借り受け、地域住民等による愛護会が整備活動をおこなっている。市街化調整地域にある「市民の森」43か所527haに対し、14か所約20haある。もえぎ野は町内会長さん所有の1.8haの樹林が池のある公園とも隣接している感じだ。家から歩いて5分ほど。愛護会は日曜と水曜に定例活動があり、林地内の草刈りなどの整備をしている。リタイヤ世代が多く、父もいい仲間ができ作業と交流を楽しんでいた。作業後には高台の青天井や作業小屋でお疲れさん会もあり、父はこの「昼酒」も楽しんだ。すぐ隣にある小学校の生徒さんたちとの交流でも「孫のいない爺」として歓待されていた。「現場に出て身体を動かす楽しさをやっと知ったんだね」と私に言われながら。

2006年には、母とのエッセイ集『二人で歩いた まち・むら・人生』を出している。最初は、母の3回忌（父は宗教的な行事はしないが）までに出すつもりだったらしい。しかし、2002、03年ごろはまだまだ仕事もあり、手につかなかったようだ。この編集過程については、なぜか「通信」にはあまり出てこない。なぜだろう……「二人で」にこだわったか？

父の思い出を、父の残した文書を読みながら、つらつらとたどってみた。多くの文書が残されているので、またこういう機会を持ってみたい。

石田周一 / 1961年生まれ 青葉台育ち 障害福祉団体職員・よこはま里山研究所NORA理事 横浜田園都市で障害児者や市民と共に都市農業に取り組んでいる。著書『耕して育つ 挑戦する障害者の農園』（コモンズ・2005年）